

私の和英韻律法

——とぼと歩み詩の記——

My Prosody in Japanese or in English—My Prodding Way of Composing a Poem in Japanese or in English

富田光行

Mitsuyuki Tomita

私が和詩の鑑賞も創作も出来ないくせに、英詩の作成に飛びつて、すでに三十有余年になる。それでは、どんなものを作成して来たかを、一二後述させていただくとして、五里霧中を模索して来た跡の一端も語らせていただきたい。

私が英詩を志向するに当って、手に取った参考書といえば、先づ第一に昭和十年頃のものか、標題も忘れたが、多分平田秀木先生の四六版・厚さ7ミリほどのものであったが、これは馬鹿にしてはいけない、私にとって非常に貴重な参考書となった。それから、次に第二は、これも標題が Versification というだけで、その出版社名も出版年代も忘れてしまったが、その規格から追想すれば、多分 Oxford Edition 物であったか。私は、これによって決定的な指針を得た。然るに、前者は多分倅二男にくれたか、後者は図書館からの借用で、二度と手に触れることはなくなった。今では、いづれも、なつかしい師友という印象になっている。

英詩の作成はむずかしいという人が多い。然し、韻律法の三大要素、つまり meter → rhyme → stanza と、順序よく説明してあれば、興味は次々と湧いて来るものであるが、その論順を誤ると、英詩の作成は、実にむずかしいものだと思わせることになる。ところが、英詩の韻律法に関する参考書で、その後私は不幸にして、良書を見る機会に恵まれないうまま、今日に至っている。良書の出現を待つや切なるものがある。

さて、凡そ芸術作品、特に詩も、その鑑賞と創作との両立が出来れば、ありがたい。それで、私は和詩（自作であろうと、他作であろうとに拘らず）を英詩に、英詩（これも、自作であろうと、他作であろうとに拘らず）を和詩にとの欲深い方法を辿って来たのである。私は「両刀使い」が好きであるし、またこれで行くのが本当のような気が

がしている。それで、先づ他作を訳詩にを第一に、次に自作を訳詩にを第二に、例示しつつ、この気持を語ることにしよう。

〔I〕 他作を訳詩に

他作の英詩は、すでに固定したものであるから、その原語なり、その原位なりに一つ一つ適語・適位があろう筈はない。この故に、ただ出来るだけ、原意を損わないように、良心的な努力を捧げるより仕方がない。

(1)私は先づ限りなく慕わしい詩人 Robert Burns の Auld Lang Syne に立ち向った。そして、その時、私は(1)和英両語に於けるロゴス(λόγος)の宿命的な相異には、お手を挙げ、せめてはそのたぎるパトス(παθός)をだけは自分の人間的な限界に於て、その原意を再現すること、(2)出来るならば、原作のメロディーで歌えるように、音数を配列すること、などに注意した。

Auld Lang Syne

なつかしの 幾とせ

Should auld acquaintance be forgot	
むかしの友は 忘るべき	7—5
And never brought to mind?	
心にとどめ をかずして	7—5
Should auld acquaintance be forgot	
むかしの友は 忘るべき	7—5
And days of lang syne?	
遠き昔も 忘るべき	7—5

chorus

合唱

For auld lang syne, my dear
 友よ過ぎにし 昔をば 7-5
 For auld lang syne,
 遠き昔を なつかしみ 7-5
 We'll tak a cup o' Kindness yet,
 我ら交はさん 友情の酒杯 7-5
 For auld lang syne.
 遠き昔を なつかしみ 7-5

和詩は、上下二段に分け、それぞれ7音と5音とを配布し、そしてこれで、原作の各行が各様にそれぞれ流すメロディーで結構うたえるから、読者各位、ご試吟を給われよ。

(2)他作の和詩は、これも出来るだけ原意を原位で再現してみたいと考えている。例示の素材に取り上げたのは、「故郷」〔信州の人・高野辰之（下高井郡豊田村出身）の作〕。

故郷
 My Homeland

兎おひし かの山
 That mountain where I would often chase
 hares. 10
 小鰯釣りし かの川
 That brook where I would often angle
 small gibels. 10
 夢は今も めぐりて
 Those come round even now in my old
 dreams. 10
 忘れがたき 故郷
 My dear and sweet Homeland can't be
 forgot. 10

英文に移すとき、原文のメロディーで歌えるようにと、各行10音を配布してみた。これも、まあまあ程度で、気持ちよく歌っていただけらと思う。せめて、rhyme だけはと思ったが、適語が見出せないの、残念であった。

〔II〕 自作を詩歌に

自作の和詩を英詩に、英詩を和詩に、変形する

場合も、和英両語に於ける必然的な宿命を無視することは出来ない。自分で一人がやることだから、どうにもなるのではないかと言えそうであるが、決してそうではない。それがまた例の言霊（ことま）が持つ幽玄というものか。

(1)一九六一年は、例の「川中島合戦」四百年に当る年であった。不肖私は、故縁のため、一首を捧げたのが、次の如きものであった。和詩は各行・上下二段にそれぞれ七音と五音を、英詩は各行に十音を、それぞれ配布し、rhyme も注意してみた。(a と a' とで「多少異なること」を意味した)。

川中島の古戦場
 Kawanakajima Battlefield

遠き昔の 決戦場 7-5
 Ancient Battlefield where the final was done!
 a
 涙にむせび ただ独り 7-5
 Choked with tears, I did wander all over.
 b
 探ねる跡も 今は亡く 7-5
 Searching for the remains in rain alone, a'
 恨みは長し 千曲川 7-5
 My sorrow'll last as long as the River.
 b

(2)自作の英詩を和詩に変形することは、経験の物語るところ、その逆も真ならずである。頭の中で、英詩を作る方が和詩を作る方よりは容易な場合がある。私に於ては、次例がその一つである。英詩では各行に十音を、和詩では各行に七音を、それぞれ配布し、そして英詩には rhyme の点も出来るだけ努力したつもりである。1979年11月19日、晩秋の山麓・静かな書斎での駄作であったに過ぎない。

Gentian of Shinano
 信濃のりんどう

Under the blue sky and on the plateau, a
 蒼窮の下 台地の上に 7-7
 There has lived a flower beautiful blooming.

